

それにしても、日々なかなか明るいニュースに出会わない。ブラック企業から自然・人為災害、そして緊迫する国際情勢まで、これからの社会や自分の人生がどうなっていくのか、不安な気持ちを抱えている人も少なくないだろう。リスクということばは、そんな時代の雰囲気につくりくられるせいも、日常的にもよく使われる。

では、リスクとは何なのか。将来的に自分の身に起きるかもしれないよくない出来事なのか（失業のリスク）、それか起きる確率なのか（喫煙の発がんリスク）、よくないことを引き起こす確率が高い何かのことなのか（飲酒運転はリスクだ）、それとも一か八かの決断のことなのか（リスクを取る）。考え出すと、アウグスティヌスの有名なことばよろしく、わかっていたはずのものがするりと逃れていく。かといって、抱えていた不安が消え去るわけでもない。

ここでは乱暴を承知で単純化して考えよう。

人間の生活は、多かれ少なかれ、つねに未来に対する不安を伴っている。そうした不安に対して人は思いをめぐらせたり、何かしら備えたりしている。リスクを広義にとったとき、リスクとはこの、不安な未来の出来事や、それに対する「構え」を指す。

それに対し、リスクというものをより限定的に捉える見方もある。そのポイントは、未来に起きうる問題を、確率・統計理論などをもとにして客観的に比較可能なカタチ（た

## リスク Risk

木村 周平 きむら しゅうへい 筑波大学助教

### 人間学の キーワード

転ばぬ先の……

たとえば数値）に変換する、という手続きを含んでいることである。この、一種の科学的なツールとしてのリスクは、ある出来事が起きる前に、それが実際にどれほどの被害をおよぼしうるのかを評価したり、社会的に許容できるレベルを考えたり、社会としてあるいは個人として、わたしたちが取るべき対応を決めたりすることを可能にする。ただし、このツールを用いた対応の成功・失敗は、「自覚的・合理的な意思決定の結果」だとして、その人の責任に帰されるようになる、という側面もある。

現代社会においては、後者の意味でのリスクが社会のさまざまな局面・領域に浸透しつつある。このこと自体は、必ずしも悪いことではない。しかし問題なのはそこで生じているふたつのことである。ひとつは、科学技術の発展に伴う新しい複雑な事態（環境破壊や原発事故など）が、このツールでは十分に被害を把握したり、対応したりできない側面があること。もうひとつは、リスク計算にもとづく能動的で自由な意思決定が称揚される一方で、「社会」というセーフティネットが機能しなくなり、結果的に弱者が切り捨てられてしまうことである。これらは現代社会の避けがたい帰結のようにみられるが、本当にそうなのか。わたしたちは「リスク」ということばで何かを説明しようとするまえに、そのことばによって何が説明されたことになってしまっているかを考えてみる必要がある。